

は思ふ事もなし首を召され候へこ甲を抜き捨て又問尋しでを屠たりしが忠平公聞し召しこわ哀れなる事共かな一子の處は扱置汝降参仕れ平に々々の玉へば丹後の守此由承りこわ難有き忠平公の御掟かな去あらは御暇申さんと腰の添差抜き持てふるの鎖を掻き放しあしたの露こ消へにける未たおしかる年の卅一歳しまぬ人こそなかりけり之れ等を初めとして伊藤方に於て其名記るすに先一番に大かゝ伊東加賀の守祐安同苗新三郎祐信伊東左衛門の尉長倉勘解由落合源左衛門柚の木崎丹後の守政家伊東權之助伊東源三郎これらは皆大將なり其外一騎當千の兵共は

百六十余人は一足も退かず皆聲々に名乗つて打死すぐ様々に皆打死しあなたこなたの時刻を移す其暇に大將義祐は虎口を逃れ都の郡へ落ちて行く島津方の軍勢共勝に乗て追かくる忠平公此由御覽なされ勝に乗つて長追しては悪かるべし先ツ引取れや者共と諸軍勢に下知をなし飯野の城に引かせ給ふ茲に川上上原を初め家老の面々進み出て申す様臆病神の付きたる伊東勢大かゝ何程の事をか仕出すべし此序に境目御越し御働きをも候は手立つものは候ましと勇み進んで申し上れば忠平公聞し召し其儀尤さりながら窮鼠却て猫を噛み狗犬却て虎を喰むと云ふた

こへあり伊東方も未だ名ある兵多くあるべしたとひ亡ぶと雖ど
 味方大勢損すべし勝て甲の緒をしめ時節を待てとのたまひて境
 目堅く相守り、月日送りて御座します」茲に又伊東義祐は大
 隅薩摩に掛け數度の戰に家の子郎等を残り少なに打なされ無念
 至極はなかりけり今一度境目打破り數多の城を攻め落し會稽の
 恥を雪がんと明暮手たてを徊らせど味方の者ごもは皆臆病神に
 誘はれて妻子を隠し落ち仕度をぞしたりける茲に又福永丹波の
 守祐友は此由つくくくと見て伊東殿の滅亡すべき時節は早此時
 なりと思ひつゝ、我度々諫言しけれごも諫言耳にさかひ良藥

は口[△]に若[△]き習[△]にて、却て不興蒙る事は無念至極に思へごも之れ
 は又前世の事なれば恨みる事は更になし傳へ聞は伊東殿も未だ
 前非を悔ひ給はす此度又大隅薩摩に發向せんご企ある由家の滅
 亡遠からず君辱めらるゝ時は臣以て死すと云ふ事もあり家臣と
 して今一度諫めざらんは恥の至りなるべしと一通の諫言狀を認
 めワザト苗字はかゝずして夜半にまぎれ伊東の館に忍び入り門
 内に差し置いて、宿所差してぞ歸りける、兎にも角にも福永が
 所在の程は天晴勇士の舉動かなご感せぬ者こそなかりけ
 る

○粟津の露

名將の下したに弱卒なし眞なるかを此言や木曾左馬頭義仲は平家の軍を追落し切り頓て都に入替り大かん勢旭の昇るが如く一萬我儘に働けば相従ふ者共洛中諸所に打散りて金銀財寶を奪ひ取る其れのみならず恐多くも法皇を五條の御所に押込め参らせ四十人の官職を奪ひ百官有司の進退も己かまにくに行ひつゝ亂暴一方ならぬよし追々鎌倉にぞ聞きける頃は元暦元暦元年正月十三日右兵衛佐頼朝は木曾が狼藉しづめんとて舍弟蒲冠者範頼を夫手

の大將とし九郎義經を搦手の大將として鎌倉を出發せしめらる範範頼に従ふ輩は武田太郎信義加々美遠光一條次郎板垣三郎小笠原次郎を初めとして于是常胤和田義盛稻毛榛谷金子偕俣芦名高山等都合其勢三萬五千餘騎義經に隨ふ人々は安田遠江守義定大内太郎維義田代冠者信綱畠山次郎土肥次郎其外佐々木兄弟梶原父子熊谷平山佐藤伊勢武藏坊辨慶等都合其勢一萬五千餘騎尾張の熱田に勢揃へして宇治と勢多とへぞ向ひける爰に佐々木四郎高綱は惣勢出發の日に後れ鎌倉殿へ參上し御暇申し今罷立つ頼朝佐々木を呼返して曰はる、様此度木曾追討の戦には

定めて宇治勢多の橋を引くべきなり其方近江生立の事にしあれ
 ば川の案内知りつらん宇治川の先陣仕り候へて生月と曰ふ名
 馬をぞ賜ひける高綱畏り頂載しかかる御惠に逢奉ること中かん
 生涯の面目此上なし」此度の戦佐々木討死と聞召され候は、川
 の先陣人に越さるゝと思召せ又生きて有りて御聞きならば先陣
 仕りぬと思召されよと其まゝ御前を立にけり爰に又梶原源太景
 季は今度拜領申たる摺墨と曰ふ逸物を黒装束に仕立てさせ舍人
 八人に率せつゝ駿河國なる浮島が原にぞ着にける此處にて小高
 き所に打上り暫し控へて人々の牽せたる馬を見てあるに蒲殿の

月の輪九郎殿の青梅波和田義盛の白浪さては畠山の秩父鹿毛等
 を始めとして大名小名思ひくゝの鞍置て幾千萬を知らすかゝる
 内にも景季か摺墨程の駿馬は更に無りけり景季余りの嬉さに金
 子十郎を打招き頻に誇りて在る所に佐々木か生月率き來る渺茫
 たる春の野の草も萌なん頃なれば生月勇みに勇み立ち大かん鞍
 も飛ぶほご躍りつゝ「二度三度嘶へける聲はさながら鐘を撞く
 が如くにて二里の路を隔たる田子の浦まで響きける畠山重忠云
 ひけるは今の嘶は生月か聲なり半澤六郎聞咎めかばかり多き勢
 の中如何でか生月に限るべき生月は蒲殿も梶原殿も御所望ある

にも免されさりしを誰人にか賜ひ候はむ重忠重ねて曰ひけるは
 よもきよはたがへじ必定生月か聲なりと曰ふ間程なく生月を舍
 人六人にて率來る梶原景季是を見て郎等を以て尋めるに佐々木
 殿の馬に候と舍人は答へて行き過る源太不審晴やらす三郎殿に
 候か四郎殿に候かと再び尋問するに四郎殿ぞと答ける源太是を
 聞や否や口惜さ遣方なし再三所望申ても御免しなかりし生月を
 高綱に賜ふ違恨さよ大將たる其人の大事を前に置きなから偏頗
 せらるゝ事やある是程の御氣色にて有らんには千世榮ゆべき世
 の中ならず思へば電光朝露の如し終に死なんは同じこと日頃佐

々木に宿意はなけれど時に取ての敵なり差違へ死すべしと思ひ
 つめ今やくと相待ける斯くとも知らぬ高綱は我手の郎等十七
 騎相從て出來り源太頓て詞をかけ如何に佐々木殿生月は下し賜
 ひて候にやと問ひかくる高綱きつと思ふ様誠やこの人生月所望
 しつるよし高綱拜領せりと實以て曰ふならば刺違へんは必定な
 りすかして見んと思ひつゝ莞爾と笑ひて申しけるは此間久しく
 見參せず仰の如く生月を率ひて候事不審に思召されん承れば蒲
 殿も御所望ありしに下されずと聞きつれば高綱如きか乞たりと
 も迎も許されはなき事と思ひ御厩の小平次を相談ひ盗出して候

なり今にも鎌倉より御勅氣の御使や來るとひたすらに胸を冷す所也とさあらん体にぞ答へける景季案に相違して實にも容易く盗み出し給へるものかな其義ならば某も盗むべかりしものをして打ち笑らひつ諸共に「切馬をならべて立にけり」

二 段

然る程に義經の二萬五千余騎川端に臨みて見渡せば敵は川岸に搔楯かいて「切矢尻を揃へて待かけたり」大かゝ川の中には亂杭逆茂木すきまなく「大綱小綱を流し掛け時しも雪消の比なれば水深くして流れ早く何處を渡らん様もなし本陣評議の最中の島

(201) 粟津の露

山次郎重忠進み出で某瀨踏して御目に掛んとて手勢引き具し五百餘騎馬の鼻を並ふる所平山季重佐々木太郎遊谷重佐熊谷父子宇治の橋桁打ち渡り早戦を初めたり是に引き違へて佐々木四郎高綱梶原源太景季は平等院の小島か崎へ打向ひ馬を飛して打出つ梶原其日の装束は木蘭地の直垂に黒革威の鎧着て三枚甲の緒をしめ重藤の弓を持ち小中黒の征矢を負ひ塗鞘の大刀佩ひて鎌倉殿より賜りたる摺墨の名馬に黒塗りの鞍置いてぞ乗りたりける高綱が装束は褐の直垂に小櫻を黄に返したる鎧に鉄形打ちたる甲の緒をしめ重藤の弓の真中取り廿四指したる石打の征矢

る武士の八十氏河のいちはやき、弓手並の程こそ見えにける」

○赤 星

國を申せば肥後の國在所記るせば割府と云へる扱も在所に赤
星源次綱明にて、弓取り一人おはします、大かゝし、かも其頃肥
前方に味方召されける。其歳の年號申せば天正九年辛巳頃は卯
月七日と申すに肥前方龍造寺山城の守隆信方より使者の参りて
申す様如何に申さん赤星殿誠に肥前に味方召されるものならば
人質賜はれ赤星殿と御意下る赤星承り扱は中々國主の御意とは

申せども誰をか質に参らせん使者の詞に歳は十四に成らせ給ふ
松若殿とて若のある由肥前屋形に隠れなし彼の若質に々々御
意下る赤星承り扱は中々若は一人候へど彼の若質に出しては後
の歎きは如何せん去れど又國主の御意には叶ふましと若を召寄
せ御尋ねあれば若の詞に某國にありながら大かゝ二人の親の
御奉公國の爲めとなるならば「今日唐土迄も参るべし質に渡ら
ん事は御心安く思召されとて頓て十八人の士を御供に召列れ給
ひ肥前に御渡なされ佐賀の御内に伺候あるこそ哀れなりいま
三日もすぎざるに大かゝ重ねて使者の参りて申す様如何に申

さん赤星殿歳は八ツに成らせ給ふ安千代殿とて姫のある由肥前屋形にかくれなむ彼の姫質に渡し給はれ左もあらば兄の松若は國へ歸すとの御掟なり赤星承り扱は中々姫も一人候へど若を質に出してさへ幼少の姫迄も質に出しては母が難きは如何せん去れど又國主の御意には叶ふまじと姫を召寄せ御尋ねあれば姫の詞に某國にありながら中々二人の親の御奉公兄の替り國の爲となるならば「京鎌倉迄も登るべし況んや肥後と肥前は近き間と承る質に渡らん事は御心安く思し召されとて頓て士二人女中六人を御供に召列れ給ひ肥前に御渡なされ佐賀の御内に兄弟と

もに伺候あるこそ何より物の哀なり」是は扱置き茲に又「肥前に於て強顔士隈部左馬の介親興と申せしは赤星殿と界の論を召されしが赤星殿より三百余町をふみ取られ兼ねて此事を意恨に思はれて如何にもして赤星に腹切らせんと思ふ折節の事なれば之れぞよき折と心得て直ぐに隆信殿へ作り文を上げにける隆信此文を御覽なされ以の外に腹を立て扱は中々赤星は兄弟の子供を質に取られ無念さに薩摩に味方肥前に二張の弓を引くとかや其儀ならば彼の兄弟は此處へ置きても如何せん又國へ歸しても如何せん肥前に於て法ある法度の死置生張付よと

御意下る。痛しはや兄弟は肥前屋形に三日も置かずして肥後と肥前筑後の境南の關竹の世原に送りあるこそ哀れなり松若詞に如何に申さん隆信様某兄弟を御殺しあるならば肥前屋形にて只一太刀に殺し給へさあらばこそ士が苗字の恥辱家の恥へりがま越へて隠れ忍びは致すまし夫れ武士は中かん壘の上に育ち野原に死すを本意とは申せごも。某兄弟は夢にも知らん野原にて長く浮名の立つと思へは嗚呼之れが一つのいかゞなり斯くは云ひつゝ某は男の身にて苦しからず幼少の安千代は國へ御歸し給はれと日には七度のわびをなす姫の詞に如何に申さん隆信様某は

女の身にて苦しからず兄の松若は赤星が家の世つぎの事なればに御歸し給はれと日には三度のわびをなす隆信御掟に如何に御兄弟科なき隆信を恨み給ふな謀反心の大かん父の赤星を恨めこのたまへば。安千代詞に如何に科なき隆信様をうらみ申さん况てや父の赤星をも恨み申さぬ恨のあるは中より作り文を上げにし隈部殿こそ今生後生の恨みなり松若詞に如何に安千代何某の子孫と云つて女にこそは生れけり人を恨ては如何せん死出の山三途の大川左京が橋迄も諸共に悦び給ふぞ哀なり去れば松若其日の出立は何時に勝れて花やかに先つ肌よりは白地練絹紫

染に金糸の小袴シツカド召され頓て十八人の士を御側に召され
 申かん如何に方々鳴をしづめて聞き給へ」某兄弟は身に覺へなき
 科に上意をのたまふなり迎も上意は逃るまじ御身達は暇取らす
 る何國の里にも落ち行きて我にまじたる強き主人を頼めとのた
 まへば十八人の士は皆頭を地につけ詞を描へ嗚呼情なき若君様
 の仰かな士が強き時は主人と頼み今弱きとて君をふり捨てしは
 如何せん兎にも角にも君諸共にご申し上れば松若殿は斜に悦び
 頓て十八人の士へお盃をぞ賜はりける姫の其日の出立はいつに
 勝れて花やかに其頃肥後に流行りし十二小袖を召れしがたけと

一夜の黒髪は月の輪形にませ給ひ頓て六人の女中を御側に召さ
 れ申かん如何に方々鳴をしづめて聞き給へ」某兄弟は身に覺え
 なき科に上意をのたまふなり迎も上意は逃るまじ御身達は干に
 一ツモ隆信様より御暇賜はるものならハ割府の在所に落行きて
 二人の親の御前に参り某兄弟斯成り果たる有様を一事も洩さず
 皆申上げよこのたまへば六人の女中は皆頭を地につけ涙を流し
 誰こそ御返事申す者もなし頓て松若殿は檢使を御側に召され如
 何にはたの板は西へ向けると中せども某兄弟は申かん「肥後の方
 へ向けて賜はれ」左もあらば割府の在所へ二人の親のあると思

へば嗚呼吹き來る風迄なつかしや檢使如何にござりければ痛し
 や兄弟も運や盡きるらん其の日の檢使隈部殿にてありければ如
 何に兄弟 大かん はたの板は往古より傳はれる儀式なれば「東へ向
 けては天道に恐れあり御身達兄弟迎ても西へ々々とありければ
 痛しや兄弟は最是力に及ばずと割府の方を三度招ぎてはたの板
 へぞ召れける三日が間小歌拍子にて夜をも晝をも暮し玉ふ痛し
 や姫君未だ幼少の事なれば三日に當る扱も酉の上刻 吟替 竹の代
 原の朝の露と消へ玉ふ松若詞に如何に安千代未だ此代にあるか
 なきかご問ひ給へば答ふるものは竹の世原の松風に空飛ぶ鳥の

羽音斗にて愈々哀れは増さりける「松若殿も次第々々におとろ
 へて七日に當る扱も午の刻竹の代原の朝の露と消へ給ふ御側十
 八人の士は此由一目見て最是力に及ばず皆一同に 大かん 肥前屋形
 に亂れ入らんとは思へごも「多勢に無勢力に及ばずと皆はた下
 へ打寄て腹十文字かき切て朝の露と消へにける隆信この由聞し
 召し直ぐに六人の女中を御前に召され如何に方々御身達は暇取
 する何國の里にも落ち行けとのたまへば女中勝の前御返事申す
 様嗚呼情なき隆信様の仰かな某が廿の時より御乳を上げしに姫
 君さへも御助けなく數ならぬ我々共へ賜暇ばれば國とて國へ落

行き如何せん兎にも角にも姫諸共にご云ふより早く皆思ひ々々に清く自害を致さるゝ未だ惜しかる歳の勝の前が廿八侍従の前が廿六千壽の前が廿五侍従廿三少將十八小櫻が十六何つれもおとらん花盛り夜半の嵐に誘はれて散りて行くこそ何より物の哀れなり」大かゝ。是は扱置茲に又「隈部副島田尻の人々は此序に赤星が領地を手取りにせんと皆思ひ々々に我が手斗を引具して隈府の城を十重廿重に取圍み大かゝ吐氣の聲をドツト揚げければ」赤星殿は此由一目見て以の外に打驚き扱は中々夢かうつゝかまほろしか夢ならばさめても行けうつゝならば消へても行

けまほろしならば暫しが程は消へやらで愈々哀れは増さりける去れど又斯くては叶ふへからず猛く心を取り直し城門へ火を掛けて天も霞と焼き捨る住み馴れし割府の城を袖白雪と振り捨て八代差して落ちて行く跡よりは敵は群がり繁く慕ふて追切る茲に赤星の郎等村上兵部左衛門綱高迎大剛の勇士なりしが此由見るより斯くては叶ふへからず某一人跡にふみ止まり防ぎ矢射て人々を落し申さんご後陣逆に引下り頓て大音揚げて名乗る様茲に扣へしは赤星が郎等に村上兵部左衛門綱高迎名を得たる強弓の精兵矢次ぎ早の手きなり汝等共よく見よかゝる矢先き

に敵は嫌ふましと五人張に十五束差し取引津め射る程に生死は知らねご三十六騎は射て落す最早矢種も盡きぬれば持たる弓をガラリとなげ捨て三尺六寸の大太刀を抜き持て群がる大勢が中へ割て入り當るを幸ひ爰を詮度と世に烈敷火花を散して攻め戦ひしが向ふ敵七八騎は打取り其身も數ヶ所のさすを蒙り「迎も叶はん事なれば駒より飛下り小高き所へ馳上り腹十文字かき切て朝の露とぞ消へにける未だ惜しかる歳の卅一惜しまぬ人こそなかりける漸々此隙に赤星殿は虎口を逃れ八代差して落ち給ひ八代の慈眼寺正福寺彼の二ツの寺を深く頼ませ玉ひ終夜百萬邊

を唱へ兄弟の追善を營み玉ひて三歳が程は「ヨリ」日月送りておわします」

同 二 段

去程に期くて三歳も過ぎ行けば徳の口より夜船に召され薩摩を頼みに下らせ玉ふ順風よければ帆を揚げて程もなく出水「米の津に着せ給ふ」大かん「其頃米の津は島津義虎ハムノ御持なれば」直ぐに案内乞て義虎御前に参り如何に申さん義虎殿某は肥後に於て赤星源次綱明と申すものなり三歳以前肥前に於て強敵士隈部左馬之助親興と申せしものゝさん言に依り兄弟の子供を無殘

に殺され其上敵に攻められ未だ太刀も揚らん次第なり何卒肥前
方に一度弓を引て玉はれ義虎殿と涙を流して頼みければ義虎
公聞し召し扱は中々中かん代に無殘聞くよな次第かな」其儀なら
ば是より北に當り大口と云へる在所に新納武藏の守忠元とよ弓取
一人おわします彼を深く御頼みあれと案内一人付け玉ふ赤星殿
は力に及ばずと涙と共に義虎御前を下りける夫婦打列れ面は月
日にさらされすそは露袖は涙に打しめり伊勢編がさで顔隠し代
は逆の竹の杖ツク々々兄弟の子供の事が彌増る名所舊跡尋れ
ば音に名高き盤若寺越を軽く召され急がせ玉へば此處は早菱刈

表大口に成りぬれば直ぐに案内乞ふて武藏殿に御對面なされ彼
の事頼み玉へば武藏殿承り扱は中々中かん代にむさん聞くよな
次第かな」其儀ならば是より東に當り日洲佐土原と云へる在所
は島津中務大輔家久迎軍奉行の御在ます彼を深く御頼みあれ左
もあらば此數ならぬ武藏にも一番に参り島原にて功名致さんと
こ左も潔よく返答し案内二人付玉ふ赤星殿は又も力に及ばずと
直ぐに大口を御立ち成され名所々々尋ぬれば音に名高き高鼻越
を軽く召され眞幸五ヶ所をかけ通り白鳥山を伏し拜み野尻紙屋
を馳せ通り急がせ玉へば程もなく切り日洲佐土原にぞ着せ玉ふ

直ぐに案内乞ふて中務御前に参り如何に申さん中務公某は肥後に於て中かん赤星源次綱明と申す者なり「三歳以前肥前に於て強敵土隈部左馬の介親興と申せし者のさん言に依り兄弟の子供をむさんに殺され其上敵に攻められ未だ太刀もあがらん次第なり漸々此處迄参り候なり何卒肥前方に一度弓を引て給はれ左もあらば代々の御恩如何でか報ずべしと頭を地につけ涙を流して頼み玉へば中務公聞し召し大かん扱は中々以の外なる仰かな」當國は矢崎合戦以來赤星殿は大敵肥前隆信は清和源氏の末なれば弓矢に取ては味方なり其儀無用々々ご御意下る赤星殿は心も亂れ

氣も絶て最は力に及ばずと涙ご共に中務御前を下りける大かん是は扱置茲に又「中務公の御嫡子又七殿ご申せしは今年十三才にならせ給ふが赤星が斯くの次第をあわれご思し召し直ぐに中務公の御前にひさまづき如何に申さん父上様中かん國主が國主に加勢を頼むは代にある習ひ」たごひ大敵にもせよ夫れ武士は昨日の敵も今日は味方となり今日ある味方も明日の仇何卒肥前方に一度弓を引て給はれ左もあらば此數ならぬ某にも二ツの歳を頂き十五才と罷成り御馬の先きに罷出島原にて功名致さんと勇み進んでの玉へば中務公聞し召し又七殿の心を感じ其儀

ならば早く赤星を呼び返せこのたまへば又七殿は大きに悦び直
 くに御前を罷立ち自ら門外に立ち出て赤星を呼び返し給ふ赤星
 殿は斜なつかに悦び又も中務御前に参りける中務御掟に如何に申さん
 赤星殿ちかひ「當國あつくにとても島津義久が圍みの地なれば治定返事は
 致されぬ」されど又義久に御意を伺ひ兎にも角にも弓引かでは
 叶かふまじこのたまへば赤星殿は斜なつかに悦び三重さがりて三度の拜
 をなし頓とがて旅の假屋に下りける夫より中務公は期き直ちに佐土原
 小路々々に島原よせと觸れさせ給へば我も々々進兵中務御手
 七百騎又七殿御手に三百騎都合一千餘騎にて早佐土原を御立な

され「何事も勝目の坂を打越へて去川を死出の三途の大川と打
 渡り最早庄内三俣日は高城と打ち過ぎて都の城に一夜の宿陣召
 されける直ぐに其の夜は北郷一雲殿へ御内談召されしが期き馬
 一雲心得たりと云ふ儘に直ぐに都の城中へ島原攻めと觸れさせ
 給へば我も々々と未だ時刻も移さぬ其暇に五百餘騎は只やみ々
 々と馳せ集り「早夜も明けしかば都の城を御立ちなされ最早本
 土原三重町過れば元服と渡を軽く召され平羽瀬すぐれば夜は深
 更の峯を打越へ糸原をも打通り心安くも通り山駒は立ねど牧の
 原急がせ給へば程もなく福山の宮が浦にぞ着せ給ふ夫より中務

公は浦々の兵船廿餘艘を御催し宮が浦より夜船に召され先一番に中かん弓手に見へしは櫻島」妻手に見へしは源氏の氏神正八幡を伏し拜み加治木の里を詠むれば音に名高きじや王嶽嵐に花の數散りて流れて出る黒川や此處は帖佐の小松原心岳寺をも伏し拜み君に大崎龍が水御船の明神伏し拜み暫しは此處に浮かり船裏吹く風に帆を揚げて今朝の嵐に早鹿兒島の切り春日の里にぞ着かせ給ふ」直ぐに五社御參詣思ひ々々に祈願の程は限りなしみどりは風に靡き柳の町をも打過ぎて浮世を廻る車町夫より中務公は御屋形に參り義久公に御對顔なされ赤星か斯くの次第を

御申しあれば義久公聞しめし其儀ならば弓引かでは叶ふまじ軍は勢の多少に依らず時の大將の運に依るべし此度の戦は中務父子と御意下る暫し御内談召されしが夫より直ぐに鹿兒島小路々々に島原よせと觸れさせ玉へば我も々々と進む兵其名記るすに先ツ一番に御一門に取ては島津中務御父子御同苗圖書の頭忠長島津主衛門の尉種子島大膳の太夫其外士大將に取ては先一番に新納武藏の守忠元上原長門の守川上三河の守喜入攝津の守忠政樺山權左衛門の尉久高入來の院又六重時阿多長壽院盛淳山田正巖押川強兵衛鎌田寛政伊集院久治宮里野村弟子丸梅北某伊

勢彌九郎貞正中にも河田駿河の守川上左京久堅稻留左京猿渡右京出水方に取ては先一番に島津義虎公を初とし御同苗伯耆守町田出羽の守平田和洲村田狩之介を先きとして「御一門外に士大將廿余人惣勢一萬三千余騎にて早鹿兒島を御立なされ鶴丸山を跡に見て音に名高き水上坂を輕召され腰は掛ねご横井町間遙の五本松君の心は清淵涼み松伊集院六郎坂を輕くめされ弓はなけれど矢立原城はなけれど城の町急がせ給へば程もなく市來の港に着かせ給ふ市來の港に一夜の宿陣召れける大隅薩摩遠國なれば肥前に合する旗廿四本と聞へける夜も明けしかば市來の港を

御立なされ佛の前ではあらねども佛生橋をも打渡り二度と歸らん薩摩山大かみ死出の山ぞと打越へて「敵に向田川内川を三途の大川と打渡り直ぐに新田八幡へ御參詣なされ中務公御祈願に南無や八幡大菩薩此度貪慾無道の隆信を何卒打たせ給へかすと深く御祈願召されつゝ頓て川内を御立なされ西方阿久根をかけ通り高城の小路を打すぎて急がせ玉へば程もなく出水米の津に着せ玉ふ義虎公の旗揃へ米の津にて三日がほごは軍評取り々々なり茲に川上三河の守上原長門の守彼の人々は薩摩に於て兼て物に馴れたる屈竟の兵なれば天草島へ打渡り天草殿へ此由かくご

告げければ天草殿は心得たりと云ふ儘に直くに足輕雜兵五百余騎をすぐり出し薩摩方へ加勢として渡さる。頓て此由中務公へかくこ申上れば中務公は斜に御悦び直ぐに御馬は徳の口へ廻さる夫より浦々の兵船三百余艘を御催し矢筈が嶽より吹きおろす嵐と共に舟押し出す名所舊跡浦々詠めて面白や先一番に中々夕生きて今朝早あらはれ出し者はわらび島「瀬崎笠山三日月山を後に見て時に渡せば今浦本浦唐木崎笛と大鼓はなけれごも神樂崎をも打すぎて敵の爲にはししの島味方の爲には命長島今日の日も早吳羽鳥一夜の宿を輕島敵に向へば荒江崎夜はほのく

こあこう島朝日に向ふ日の島や寐亂れ髪のかつら崎若はなけれごも御所の浦おしは住まねご池の浦名残り惜しさの姫の浦風に柳の瀬戸を打すぎて五月中はの麥の浦三角の瀬戸を漕ぎ出て今朝の嵐に早島原の「高濱へぞ着せ給ふ」すぐに島原の安徳寺に御陣召されしが夫より中務公は軍の手配召されける先一番に稻留左京猿渡右京五百餘騎にて島原口の固より島津主衛門の尉を初め新納武藏の守種子島大膳の太夫彼の方々は三千五百餘騎にて野首の陣に籠り玉ふ島津義虎公を初とし御同名伯耆の守町田出羽の守彼のかたは二千餘騎にてからめ手口の固めなり

伊勢彌九郎貞正河田駿河の守川上左京久堅彼の人々は一千五百餘騎にて桑原の陣に籠りける島津中務御父子川上三河の守上原長門の守彼の方々は残の勢を引き具して總陣へ籠り玉ふ足輕雜兵五百餘騎を勝り出し之れは後先陣の御手當なり頓て此由肥前方へ使者を遣はさる使者は案内乞ふて内へ入り頓て隆信殿へ此由斯く告げければ隆信殿はからくと打笑ひ愚人夏の虫飛んで火に入る風情かな音に聞く島津兄弟を此度我手を以て安々と打ち亡ほし三ヶ國を我が手に入れ九洲九ヶ國の主となりて子孫永く榮花に榮えんと勇み進んで勢揃へ六ヶ國へ島原よせと

觸させ給へば我も々々進む兵先一番に鍋島加賀の守直重田尻副島隈部左馬の介親興はく刑部和田民部伊東常陸守同苗縫の介野中大膳吉弘喜兵衛の尉宗晴小川武藏の守寺山陸奥の守を初として士大將九十餘人物惣勢六萬八千余騎にて龍造寺隆信を總大將として九十三本の旗を靡かせて吉日あらば肥前の城下を御立なされ島原へと志す此人々の勢の程は如何なる勇士も面をそはめ中々恐れんものこそなかりける

三 段

去程に肥前軍衆は薩摩方を一目見て案にも違ん小勢かないら高

珠數ではあらねども手の内にてもまんと勇む勢荒鷹が小鳥をね
 ろふて切り勇むが如くなり」大かゝ薩摩軍衆は肥前方を一目見て
 此度の戦は薩摩に再び歸るとは皆思ふなよ猪武者ではなけれご
 も向ふたる敵は只一筋に切て通れと諸軍勢に下知をなし薩摩に
 二心つかはん其爲に三百余艘の兵船は皆島原の高濱に引き上げ
 て一同に火を掛け天も霞と焼き捨る薩摩方をよくく物にたと
 ふればかご鳥網代に籠る魚とかや前は大敵後は大海左右は岩石
 そばたちて洩て行くべき様は更になし大かゝ是は扱置き茲に又
 河田駿河の守は薩摩に於て兼て傳へし兵道の達人なれば清水が

谷に下り夜の間七度の氷をかゝり天に向て祈り給へば其夜源
 氏の氏神正八幡の御夢想に此度の戦は肥前は敗軍薩摩の勝軍と
 神慮にましますせば難有やなご河田殿は大に悦び頓て此由中務公
 へかくご申し上れば中務公は斜に御悦び薩摩方の心を勇めん其
 爲めに陣屋々々に此由斯くご觸させ玉へばこれを勢に稻留左京
 猿渡右京五百余騎を引き具して明けの日の卯の刻計りに成りぬ
 れば崩れ濱手に三度の吐氣をドット揚げ島原口より切て出づれ
 ば肥前方隈部左馬の介が大勢に卸し合せ追ひつ追はれつ受つ流
 しつ三度の太刀打四度の追込五度の戦六度の合戦七八度目には

しのぎを削り、鐔を割り、切葉の金もみちんになれと代に烈敷爰を詮度と火花を散して戦ひしが痛はしや薩摩方は朝たちの戦に稻留左京猿渡右京五百余騎は只やみ々々と打れける。未だ惜しかる歳の稻留が卅一猿渡右京廿八惜しまぬ人こそなかりける去れど又大敵の隈部親興は打取たり。是は扱置茲に又「島津主衛門の尉を初とし新納武藏の守種子大膳の太夫彼の方々は三千五百余騎にて野首の陣より切て出れば肥前方小川武藏の守が大勢に卸し合せ爰を詮度と代に烈敷戦ひしが向ふ敵二千余騎はやみ々々打たれける。」最早是迄なりと云ふ儘に勝吐氣ドソト

揚陣所差して引て行く爰に又島津義虎公を初御同名伯耆の守彼方々は二千余騎にてからめて口より切て出れば肥前方寺山陸奥の守が大勢に卸し合せ爰を詮度と戦ひしが薩摩方危く見へけるを中務公總陣より御覽なされ斯ては叶ふ可らずと御旗本の勢をニツになして肥前方大勢が中へ横入をぞ召されける追つ追はれつ受つ流しつ西より東北より南くも手かくたは十文字八ツ花形と云ふ儘に爰を詮度と必死になつて戦ひ給へは痛しや肥前方は小川武藏の守寺山陸奥の守を初として屈竟の兵一千余騎は只やみ々々と打たれける。其外足輕雜兵共に至る迄此處彼處の

谷のつまりく切て落さるものこそ數知れず茲に又川上左京
 久堅は戦は今を花と見て直ぐに我手斗を引き具して桑原の陣よ
 り切て出肥前方寺山が死したる旗をうばひ取り肥前軍衆に様を
 替へ陣屋々々をあなたこなたとかけ廻りしが鍋島加賀の守直重
 にハタト行逢へり如何に申さん鍋島殿某は士の体もなし只今島
 津方横入の業に目がくれて君隆信公の御本陣をハタト見失なへ
 り何卒教へ給はれ鍋島殿とありければ鍋島も勢を見れば薩摩勢
 旗印を見れば肥前方暫しが程は呆れ果て居たりしが肥前方も連
 や盡さるらん中かん大荒敵を味方の勢と心得て我君隆信はあな

たに見へし温泉の小松原に御側廿六騎を召れ床机に腰を掛け母
 衣掛武者にておわします急ぎ参られよと教へける川上殿は斜
 に悦び鍋島が教の通り温泉の小松原に攻め登り見れば案に違は
 ず隆信は御側廿六騎を召れ母衣掛武者にておわします最早手の
 内と心得て直に其日の装束をハタトあらため頓て大音揚て
 呼はる様如何に申さん隆信殿某を如何なる者とや思ふらん薩摩
 に於て島津義久が郎等に川上左京久堅とは某なり此度赤星が兄
 弟の子供の恨みの太刀を受けて見給へと云ふより早く切て掛け
 は隆信御掟に如何に川上は薩摩に於てゆるある武士かゆるなき

武○士○な○ら○日○下○に○廻○れ○と○あ○り○け○れ○ば○川○上○殿○は○カ○ラ○々○々○と○打○笑○ひ○士
 が○士○を○打○つ○に○日○下○日○表○の○差○別○あ○る○ま○じ○云○ふ○儘○に○三○尺○六○寸○の○大
 太○刀○を○抜○き○持○て○隆○信○の○弓○手○に○廻○り○首○を○水○も○た○ら○さ○ず○打○落○す○御○側
 卅○六○騎○は○此○由○見○る○よ○り○主○を○討○た○せ○て○叶○ふ○ま○し○と○切○て○掛○れ○ば○川○上
 殿○は○隆○信○を○討○た○る○勢○に○爰○を○詮○度○と○戦○ひ○給○へ○ば○痛○し○や○三○十○六○騎○も
 只○一○ツ○枕○に○討○た○れ○け○る○仕○す○ま○し○た○り○と○云○ふ○儘○に○勝○吐○氣○ド○ツ○ト
 揚○け○隆○信○の○首○を○太○刀○の○切○先○き○に○貫○ぬ○き○て○本○丸○の○陣○を○心○靜○か○に○引
 て○行○く○頓○て○小○松○原○に○も○成○ぬ○れ○ハ○鍋○島○副○島○彼○の○兩○大○將○の○者○共○は○此
 由○一○目○見○て○以○の○外○に○打○驚○き○扱○は○中○々○薩○摩○軍○衆○が○何○時○の○間○に○奥○の

陣○に○洩○れ○た○か○な○我○君○の○敵○何○國○迄○も○逃○す○ま○し○と○云○ふ○儘○に○切○て
 掛○れ○ば○川○上○殿○は○大○音○揚○け○向○た○る○敵○は○只○一○筋○に○切○て○通○れ○と○諸○軍○勢
 に○下○知○を○な○し○群○が○る○大○勢○が○中○へ○面○も○振○ら○ず○割○て○入○り○爰○を○詮○度○と
 火○花○を○散○し○て○戦○ひ○し○が○痛○し○や○肥○前○方○向○ふ○敵○五○百○餘○騎○は○討○た○れ○け
 る○最○早○此○迄○な○り○と○云○ふ○儘○に○勝○吐○氣○ド○ツ○ト○揚○け○陣○所○差○し○て○引○て
 行○く○頓○て○中○務○公○へ○此○由○か○く○と○申○上○れ○ば○家○久○公○斜○に○御○悦○び○薩○摩○方
 の○心○を○勇○め○ん○其○爲○に○小○高○き○所○へ○馳○せ○上○り○大○音○揚○け○て○大○か○ん○肥○前
 方○龍○造○寺○山○城○の○守○隆○信○を○川○上○左○京○久○堅○が○討○ち○取○ツ○た○り○と○勝○吐
 氣○を○ド○ツ○ト○揚○け○給○へ○ば○此○れ○を○勢○に○三○ヶ○國○の○勢○を○一○ツ○に○な○し○て○落

る肥前の大勢にかけ合せ追つまくりつ攻めければ痛しや肥前方は秋田の水ではあらねどもつまり々々に切て落さる者こそ數知れず是は扱置茲に又中務公は又七殿を御前に召され如何に又七中かん唐土の虎は一日に千里をかけてかけ戻る「一身を捨て一毛をおしむ夫れ武士は幼き時より武藝を勵み名を末代に残し置人は一代名は末代必ず未練致すな未練致しては苗字の恥辱家の耻ぢ汝島津の家に生れ來て此度の戦に肥前方名ある兵討取り我に見せはやとの給へば又七殿畏り頓て御前を下りけるかゝる處に肥前方崩れ鍋島加賀の守が落行く處を目に掛け給ひ駒引寄

せ打乗り頓て大音揚げて呼ばる様其許に落ちさせ給ふは肥前の大將鍋島殿に見へにける何國迄落ちさせ給ふぞのがすまじと云ふ儘に駒を飛して追かけ給へば鍋島も落行駒の手綱を引さ止め「暫し思ふ様主は討たれる手勢はなし最は力に及ばずと駒より飛下り弓の本つる切り放し降参するこそ哀なり又七殿御掟に如何に申さん鍋島殿此度の戦は赤星が兄弟の子供の敵戦の事なれば國取る迄は及ぶまじ左あらば肥前の城は御邊に預け置くと御掟なり鍋島殿は斜に悦び三重下りて三度の拜をなし頓て肥前を差して落にける去れば中務公は此度の首つもりを召されし

が肥前方には一萬八千余騎と聞へける薩摩方には上下共に八百
 余人扱も打死す嶮て隆信の首を赤星殿へ賜はりければ押頂き薩
 摩方を軍神摩利支天とぞ伏し拜む其後八代御前に賜はりければ
 女心のほかなさに此首を見れば兄弟の子供の事が彌増さるとて
 烏丸の足駄にてけり上げり下げ七度目におさめ置く川上殿は此
 由一目見て大かんに以ての外に腹を立士が太刀の先きにて取り
 たる首を女の手足に掛けては如何せん申務御掟に如何に川上古
 より女童と云ふとあるが誠なりと漸々川上殿の心をなため給ふ
 其歳の年號申せば天正十二年頃は五月廿四日なり其日の支干は

源氏の氏神 正八幡の御縁日 世の中は何と聞ても唱へても
 洋は世の中つらきは隆信義理は薩摩方物の哀れを留めしは赤星
 の子供にて 諸事の哀れをこゝめたり

○日本海大海戦

烏拉の山の春の月夢より淡き人世の榮華に誇るべしトル府世界
 統一の大業も日本と戦を開きしより崩れをめたり極東の命と頼
 む旅順口 頼み少くなりけり 國の衛の波羅的 汝東
 洋に廻航し我海軍の衰運を回復せよと皇帝の勅をかしこむ口提

督覺東なくも御請して波羅的海を出發す解く纜に寄りすが露
 國氣質の妻や子と別れの涙泣く涙涙に眼くらみけん日本の水雷
 見えたりと黑白も分かす打つ彈丸に沈む英國の一漁船あはれ世
 界のもの笑ひをしらぬ顔に打ち過ぎて舢を廻す地中海蘇士の連
 河紅の海

煙鎖亞羅比亞海。

雲迷亞弗利加州

客身遙在晴天外。

九萬鵬程一葉舟

日本の詩人が口號み彼我が境遇異なれど我も萬里の征途に在り
 故郷遠く人遠し其人にしも夢にたに相逢ふことの儘ならぬ旅に

さすらふ軍人 中へ上將校を初めとし 下水兵に至るまで虫が
 知らずか後髪引かれ勝なる海の上後れ勝なる船の足兎角に航路
 はかどらず第二第三の艦隊を佛蘭西領に待合し五月雨近き空摸
 様雲陰々たる印度洋心進まず進みつゝはや支那海を打過きて日
 本海へと近づきぬ來る遅しと待受し日本艦隊の人々は通れ好き
 敵でさんなれ露國の艦隊一隻も餘すまじとぞ扣へたり聯合艦隊
 司令長官東郷大將が旗艦三笠の檣頭に翻したる信號旗皇國の興
 廢此一戦に在り衆員努力奮闘せよとありければ各艦乗組の我勇
 士家をも身をも打忘れ勇氣日比に百倍すこなたは露國の三艦隊

日本の海軍強しとて何程の事かあらん。崩れたゞ一文字にかけ破れ。と勵まぬ。士氣を勵ましてこそを先途と應戰の砲聲。天に轟きて。須彌崑岫も崩るゝばかり。日露二國の運命は此一戰の決に在り。互の覺悟死ぬ覺悟鬼神の如く荒れ廻る中にも日本の海軍は數個所の軍に功經たる戰場覺えの腕かぎり秘術を盡す根かぎり膽氣沈勇機智妙算いづれにおろかあらざれば砲に虚發の彈丸無く水雷無効の發射無し息をもつかぬ攻撃に陣形亂る露艦隊次第々々に敗北の運は頭上に落ちかゝり。旗艦スワロフ初めとしアレキサンダーオスラビヤ一萬餘噸の大艦が天を焦がす猛火に包まれ

乗組の將士諸共に焦熱阿鼻の活地獄見る間に奈落の海の底沈み行もの十七隻十五萬三千餘噸と註せらる其外二日に渉る海戰に或は降り捕へられ或は自ら沈むもの十數隻と數ふべし口提督は捕虜となりネボカトフ中將は降を乞ふ前代未聞の大海戰振古未曾有の大勝利日本の武徳ぞ難有き露國の上下震駭し。色を失ふばかりなり。萬里の波濤を凌ぎ來し波羅的艦隊のなれの果吊らふ人も波の上一聲名乗る郭公五月雨あとの空晴れて日本晴れの日本海東郷日和東郷の英名末世に残るらん。英名。末世に残るらん。

○和

強

和光同塵の神の道あまねく闇を照せごも強食弱肉の世の中は
 切らなは争の絶間なし」大かここに國を立つるもの軍備怠ること
 こなかれ」敷島の大和の國は昔より人強うして義に堅し昇る朝
 日は高千穂の峯よりつゞく大和路や其の東征の旗風の新羅に渡
 る御威稜靡き従ふ高麗百濟三韓長く藩屏の御代を傳へて二千年
 刀夷の賊の騒にも蒙古の寇の荒びにも動かぬ國の礎は寄せて碎
 くる白浪の我れより起る胡蝶陣高麗大明を動かして其國震ひ怖

れけり絶海船を連ねては豊太閤の大雄圖彼の社稷もこれよりぞ
 傾く運の未竟にはかなく消ゆる春の夢秋の風にもあはずして我
 は榮ゆる大日本時に浦賀の海騒ぎ馬關鹿兒島とさの間は砲火の
 巷となりしかごしばしが程に風なきて毒藥變じて良藥となりて
 は敵ご手を握り攘夷の國是闔國となりぬる運の月と日を懸け替
 へけらし王政はこゝに維新ご鳴神の天翔り行く龍じもの清國命
 に違ふ時撃ては碎くる威海衛露國我に仇する日攻むれば落つる
 旅順口陸の勝利は奉天府海の勝利は日本海振古未曾有の大捷は
 人の力か神業か和國強大の四文字は切ら夫の暗示ご知られけり

和強の二字は幾千の^カ神の心やくもらん

○本 能 寺

麻と亂るゝ戰國の人とし云へば誰もかも馬を飼ひ兵を練り^カ糧を收めて劍を磨す^大頃は天正十年夏五月徳川家康封ぜられ安土城下に入りしかば織田右大將信長はいと鄭重に迎へんと直に惟任光秀に響應の役を命ぜらるゝ御請いたせし光秀は亂れたる世に心得し都の手振見せばやとさしも目出たく勤めしを小人輩の言に^中善美過分の評を受け疑心暗鬼は信長の胸

にやどりし時^中羽柴秀吉中國より援けの兵を請ひしかば^中命忽ち光秀の首のうへにぞかゝりける^中光秀ひそかに思ふやう人もあらんにこの我に羽柴が命に従へとは^中君やと齒噛をなして恨みしは^中君に仕ふる人臣のよもあるまじきことなれどまた信長を見るごきは右大將とも仰がるゝ身に^中疎暴の舉動いと多く^中或時は蘭丸をして光秀の首に鐵扇を加へさせまたある時は好まぬ酒をことさらに我意を通して勸めしめ志賀の都の領地さへ三年のうちには事なくも奪ひ取られむ説を聞く今又産を傾けて新に來りし家康に心づくしのもてなし

も^{中かん}琵琶湖の水の泡と消へおさへし^焰むらくともゆる思
 ひの光秀が拳を握りて立ち上り「動く眼の間より由々敷大事の
 ほの見えしを露はご知らぬ信長は諸將を安土に止め置き親ら近
 臣百餘人率き從へて京都なる^{切り}本能寺にぞ入りにける」時こ
 そ來たれご光秀は田鶴も遊ばぬ龜山に従子光春等を召しよせて
 積る怨みのかずくを數ふるうち光秀が^{中かん}眼は血汐ほとば
 しり逆立髪は冠をつく勢を見てとりし光春ごもが百千度諫むる
 言葉も聞かばこそ推て謀叛に加盟させ暴戻無道の殺逆をば^{切り}
 企てしこそ淺ましけれ」かくて士卒を打ち揃へ中國勢を援けん

ご偽り向ふ大江山心の駒も烏羽玉の暗路をいそぐばかりにてさ
 しも忠義の光秀が追ひく年も老阪の如何なる道にや迷ひけん
^{中かん}無念至極の胸のうち亂れ「て濁る桂川渡らん駒の足なみは
^{中かん}東さしてぞ進みける」

本能寺溝深幾尺

我成大事在今夕

糠糟在手交糠食

四檐梅雨天如墨

老阪西去備中道

揚鞭東指天猶早

我敵正在本能寺

敵在備中汝能備

こゝに始めて軍勢は^{中かん}漸く二九心と悟りしが捨つる命は一

つぞと時しも六月二日の朝またき露の身輕き軍兵が本能寺をこり圍み中かん「関をつくりてぞ攻め入りける」この物音に信長は寐覺の耳を聳立つれば中かん紛ふ方なき人馬の聲館間近く聞ゆるに枕を蹴て立ち上り疾く見届けよありければ森蘭丸かしこまり表の方に走り出で見越の松に片手をかけ右手をかざして見てあれば「雲か霞に白旗に染めたる桔梗の紋ごころ崩見るより蘭丸引きかへし光秀謀叛ご答ふるに赫と怒りて信長は者共覺悟と呼ははりて弓矢おつこり立ち向ひ寄せ來る敵を物ごもせずまたいくひまに數十騎を矢繼ぎ早に射て落し勢ひ鋭く防ぎしもた

一と筋ご信長が頼む弓弦ぶつご切れ得たりと突き入る豪敵をすかさず弓もて打つて伏せ兎角するうち信長も左手の腕に痛手を負ひ蘭丸代つて拒ぐうち宿直の者もこごぶく命を的に戦へご衆寡敵せず信長は「中かん最早これまでごや思ひけむ」中かん自から館に火を放ち煙のなかに飛入て刃に伏して果てにける「鷲鳴呼豪邁の信長が空をも蓋はん大鵬の圖南の翼中空に燕雀のため悩まされ終世望み絶へたるは獅子身中の虫に倒れたるそじりを受けて人皆の口にのこるも悼ましき」續いて蘭丸を始めとし坊丸力丸の小姓ごもまた若木の櫻花嵐かざりの山の朝風にいと

床しき香をとめて中かん「散るやちりくあこやさき」百有餘人も
ろともに哀れ本能寺の切リ朝の煙りと消へにける」

研ぎ得たる心ゆるすな増す鏡

思はぬちりのかゝる世の中

つらく古今を按ずるに人に君たる王候の心すべきは徳にこそ
切リ「心すべきは徳にこそ」

〇七 卿 落

世は苜蓿と亂れつゝ茜さす日もいとくらく瀬見の小川に霧立ち

て切リ隔ての雲となりけり大かん「あ。ら。痛。ま。し。や。た。ま。き。は。る。う。ち。
に。且。暮。宿。直。せ。し。實。美。朝。臣。に。季。知。卿。王。生。澤。四。條。東。久。世。其。の。外。錦。の。
小。路。殿。中かん「身は浮萍の定めなき旅にしあれば駒さへも進みか
ねてはいはえつゝ」降りしく雨の絶間なく涙に袖は濡れ果て、
大かん「これより海山淺茅原露霜分けて蘆が散る浪華の浦に焚く
鹽のからき浮世は物かはと」ゆかん「すれば東山峯の秋風身に
しみて朝な夕なに聞きなれし明法院の鐘の音も切リ「さえて今宵
は哀れなり」いつしか暗き雲霧を拂ひつくしても、しきの切リ
都の月をし愛でたまふらん」

○毒 饅 頭

笑へば子女も懐かしみ怒れば虎を恐れしむ英邁偉絶の豪勇も
 切りまかせぬものは涙なり」大かんにこゝに加藤肥後守清正は「中かんに
 知遇の恩に身を捨て、」四百餘州を我が駒の蹄に蹴らんと勇み
 しもさめて果敢なき夢なれや哀れ太閤世をさりて世嗣の君は幼
 なし石田小西の小人等必らず事をあやまたん一度は死するこの
 身體 切り捨て甲斐ある時や來むされど仁義の深き家康に心の弓
 も引きされずさりとて幼君も捨てられず心は二つに身は一つ流

石鬼神の清正も困じ果てを居たりけるこれより先に京都なる二
 條の城に幼君が成らせられたるその時に御供なせし清正に豊國
 神社の御供物といふてもなす毒饅頭毒とは知れど家康の股肱の
 臣の澁川はそれとは知らで己れまづ毒見をなしてすゝめける其
 眞心をいなみかね一つを取りて味はへば身體は日々に衰弱しこ
 ても餘命は永からじ命あるうち今一度最後の御目見たまはりて
 歸國の御暇願はんと片桐市之丞旦元と共に出仕をなしにける今
 年漸く御七歳淀君付き添ひ出まして太閤の果敢なくも御他界あ
 りし其のちは頼みきつたる御身まで歸國をなすは家康の威に恐

れてのことなるか但しは外に望ありてかと恨をよくむ一言に清
 正伏して申すやう朝鮮までも武名をばとゞろかしたるなれの果
 いかでか恐れ申すべき且つ又外に望のなき身體家康公と申し奉
 つるは仁義に富める御大將無道の事はなされまじ干に一つもな
 されなば大坂城の鐵壁に劣らぬ程の且元あり老ひたりけれどこ
 の清正他事に見過し申さんや第一番に驅つけて敵を蹄にかけち
 らし御心やすめ申さんといと頼もしき言上に歸國の願許されぬ
 大かんと烈帛一聲不如歸と叫ぶ山時鳥血に鳴くも我が身の上
 と清正は心に思ひあきらめて秀頼公に打ち向ひこの清正の亡

き後はたゞ且元の諫言を心寛くも容れられて徳川殿を父君と思
 ひたまひて關東に必ず弓をひかせたまふなといと懇ろに申上ぐ
 れば秀頼公は聞し召し爺の言葉は守れども疾の爲めに歸國
 せば最早こゝへは參らぬか疾つのならば自らが看護をなしてつか
 はさん國に待つものあるならばを呼びよせと仰せける鬼神
 をあざむく清正も御測に侍ふ且元も聞居たまひし淀君も胸も張
 り裂く思ひにて皆一同に伏し泣きぬ果しなければ清正は心を鬼
 にとり直し御暇申し出てければ秀頼公は立たせられ爺よ
 く迹を追ひ袖を引きて泣きたまふ猛虎を挫く清正も幼き御

子の腕には引れて元の座にかへり秀頼公を抱き上げつくづく顔を見上げける頑是なき秀頼公うちむ目もこに清正の髯にすがりて別れをばおしみたまふぞいぢらしきやがて御所持の中啓をかたみにとらせ遣すと下したまへば清正は「カリ」聲も得たてず伏し拜む「嗚呼幼君がかほごまで慕ひたまふも清正が無二の心の誠實よりあらはれ出づる光にて君に仕ふる人臣は斯くありてしものと思ふなり「カリ」かくありてしものと思ふなり」

○白 虎 隊

花は櫻木人は武士散るべきときに散らされは「カリ」いかでか人に惜まれむ大かんに。に會津藩士の子弟にて。「白虎隊と稱へしは日新館の青年を撰抜したる一團にて年齢僅か十五六十七歳を頭にて忠勇義烈たぐひなし學びの窓に筆おきて劔をこつて青天を睨む姿の雄々しくも堅き心の結ほれて首將の許に馳せつけぬ早やこの時は若松のあたりは敵の領となり城内あはれ兵はつき残るは老木の梓弓かよはき婦女子はかりなり主君の安危を己が背に負ふて其身を願ぬ少年隊の勇々しくも決死隊の左翼となり戸の口原に打ち向ひ群がる敵に斬て入る折しも吹くや荒風の雨も一

時に篠をつき晝尙くらき修羅の場雷鳴山岳を震動し忽ち放つ電光のそれにもまさる早業のひらめく影は白虎の如猛りにたける。丈夫が息をもつかず戦ふも寄せ来る敵は數多く防ぐ味方は限り僅に一方を斬りぬけて生残る者十余人慶應戊辰八月の後の三日の東空に瀧澤峠の嶮を越え數ヶ所の痛手に并し血汐は両の袖を染め兵糧たにもつゝかねば飢と疵とに疲れ果て折れたる刀を杖にして飯盛山に攀ちのぼり鶴城はるかに見渡せば黒煙天に漲りて昨日の状況あはれ望みもつきてりな主君を始め奉つり我が父母に今生の別れを告げんこ跪づき涙ながらに伏し拜む心の

うちぞ憐れなりこの時早く一人は取出しる短冊の母の賜ひし和歌一首この世の別れと讀みあけて我がここに止みたりな最早何せん術なしとたちまち光る一刀を小脇にくつと突き立て、物の見事に引廻すかたへの一人おくれじと秋水逆手に我が咽喉束も通れど貫きぬ其他もこれに前後して何れも年は蕾なる若木の花を誘ひ来るあはれ無情の風吹きていと目覺して自害して秋の錦を織る山を染むる血汐となりにけりこれより先きに魁けて戦没したる少年の屍を拾ひ集め來てこの丈夫と相ならへ飯盛山の絶頂に輝く碑銘は後の世の士氣を鼓舞する基にて今に傳えて

惜しまるゝ

少年團結白虎隊

國步艱難守堡塞

黃塵掩天白日暗

警報交至四海內

忽捲風雨大軍來

巨砲連發僵死堆

白虎一隊自虎健

殺生過當何壯哉

衆寡不敵戰且卻

身裏創痕口含藥

腹背皆敵今何行

杖劍間行攀丘岳

南望鶴城黑煙揚

社稷已亡我事止

一死唯應償君恩

十有六人心肝鐵

遙拜鶴城淚潛々

意氣從容屠腹死

あゝ天何ぞ武夫の義氣と誠をこのまゝに空しく暗に葬むらん今
に其名は香りけり萬世不朽の白虎隊櫻の花のいさぎよく散る眞
心の紅は紅葉に耻ぢぬ若葉ぞこ惜まぬものこてなかりけり
惜しまぬものこそなかりけり

○辨内侍

哀れや落花情あるを流水なごか情なけん況んや仲も吉野川はれ

て世に住む妹山や脊山の嶺の月としもしばしいざよふ程もなく
 あかぬ別れの村しぐれカリ曇りやすきぞ是非もなき大かんとこ
 に河内守左衛門尉楠正行は「天下の安危を身一つに思ひあつめ
 て三吉野や芳野の宮に召れ行く頃は正平二年師走の末の冬の空
 嵐にきはふ木の葉にも霰たばしる玉笹の消えを争そふ一族郎等
 引き具して急ぎぞ來つる石川や何に騒ぐらん群千鳥鳴音亂るゝ
 彼方より中かん俄かにひゞく人馬の矢叫び敵か味方が伏勢か風
 に嘶く駒とめて山下道を見渡せば電光石火切り結び落花狼籍な
 きさけぶ乙女の聲のたまさるは必定曲者出でたりな川いでや

弱きを助けやり強きをくじきくれんづと馬上の正行眞つさきに
 刃をかざして切つて入る前より切りつ後より突き貫きつ無二無
 三當るを拂ひ逃ぐるを追ひ縦横無盡になぎ立てし撃電飛雷の早
 業はその勢ひはさながらに阿修羅王の荒れたるがごとく獸王獅
 子の狂へるにさも似たり「野分のなかの女郎花思はぬ人に救は
 れて思ふ人とはなりにけるその正行に守護されて吉野の宮にか
 へり行く辨の内侍の綾の袖濡るゝは露かつゆならず悲喜こも
 くの涙なり侍臣帝に奏すらく中かん逆賊高師直かねてしも「思
 ひをかけし辨内侍を奪ひとらん企してすでに石川の邊にて軍卒

数多取りかこみ虎口危く見えけるをゆくりなくも正行が危難を
 すぐひまゐらせて事なく歸館召されけり傳奏かくと聞し召し帯
 は御簾かよけさせ汝正行なかりせばいとも口惜しからましをよ
 くこそ助け計らいつれとて内侍を正行にたまはんと詔してくた
 されぬ何思ひけん正行は綸言いともかしくみて

とても世にながらふべくもあらぬ身の

かりの契りを如何で結ばん

と奏してこそは辞しにける。嗚呼、あゝあゝきな世の中や、身はこ
 れ右少辨俊基が忘れがたみの姫小松花の匂はなけれども操のい

ろは深みどり、結ひ給し妹と脊の縁の糸の長かれと祈りし申斐い
 本の泡消えなば消えぬの心がや。時雨につらき松さへも清き雪
 には色かゆる習ひもあるに君はそまた假初のちぎりよと言ひ
 捨てまし、御心のそこには深きゆへあらん問ぬもつらし問ふは
 またいごご耻かしとやしなんかくやとばかりとつおいつ辨の内
 侍は心から戀路の暗に踏みまよひいま一度の逢ふ瀬をと跡を慕
 ひて行き見しにこはをも如何に。中々、正行を初め百四十二人の
 耶黨は「かゝれとてしもなでざりしその黒髪を切りすて、如意
 輪堂に奉納しさて正行が鍬もて塔の扉にこめたりし辭世の跡を

よみみれば

歸らじとかねて思へば梓弓

なき數に入る名をぞこゝむる

さては我が夫正行君かゝる覺悟のまし／＼て假の契りを結ばし
と諭しまし、かそれこしも淺澤水のいとあさき女こゝろの悟り
かねつれなき君こ葛の葉の恨みしことの耻かしやこの山寺の法
の風今の迷ひを吹きかへて死なば未來は彼の國の一つ蓮の花の
上^{大か}各留半座乘華臺待我閻浮同行人短かき假の契りをは長
さまことの契りとも結びかへたる嬉しさよ帝のおんため君のた

め我が身も斯くや返しせん

大君につかへまつるも今日よりは

心に染むる墨染のそで

誠しあらば心なき空ゆく雲もたゞよはん況んや正行木石にあら
ず今や決死の出陣に契らぬ妻の眞こゝろを身につまされて流石
にも切り斷腸の思ひやるせなく「不憫の者よ健氣なる我妻なれ
とそぞろにも鎧の袖をぬらしけり切り鎧の袖をぬらしけり」

○別れの國歌

共に眺めし月影も今は屍かばねの上に照る光りも何時いつか浮雲に隔てられつゝ野も山も風蕭々と腥なまぐさき新戰場は朧夜の切り春は云へど猶寒し」大かんとこゝは戦後の奉天府」御賜の緋帯掛け巻くもあやにかしこき皇國を守る名譽の負傷兵深創淺瘻あざのその中に悲惨ひげん悲凄せきを極はめしは野戦病院の手術臺に鮮血淋漓と迸しり中かんと骨は碎け肉破れ」見るに堪えざる重傷の一兵卒は横はる夜露を拂ふ青柳の糸より細き玉の緒を暫しなりとも繋かんと軍醫は進み懇ろに應急手當施して真心こめて言へる様苦絶は如何に堪え得るか中かんと外に言ふへきことありざるか」優しき言葉や通じ

けん苦惱に閉ぢし目を開き外に言ふへきことなし早く癒して國の爲め再び戰場に立たしめよと答ふる聲もかすかにて真心こもりて力あり軍醫は頷き且つ勇み麻酔劑は徐々に取出されて施され一つ二つの數取を命ぜらるれば物憂氣に三つと敗へて今は早夢まほろしの人となる時こそ來れといふまゝに中かんと左足を見事に切斷し」忽ち小刀取直し右肩關節の切開を試んとする一切那呼吸も脈もおごろえて薬のしるし見へざれば軍醫は小刀投げ捨て、あゝ事既に終れりと涙ながらに見つむれば手術臺上花と散る大和武夫は夢ながら陛下の萬歲唱へつゝ歌ふが如く語るが

如く君が代は千代に八千代にさされ石の巖となりて苔の蒸す迄
嗚呼此世の別に君が代を奏する聲も絶々に悲むが如く嬉ぶ
が如く或は高く又低く苔の蒸す迄の七文字を終ると共に忠魂は
天の一方に飛去りて残るは名のみばかりなり」嗚呼此是兵士は
福知山聯隊區より出身の姓は杉山名は忠吉國家の外に餘念なき
いと麗はしく香はしき切り最後をこゝに遂げにけり」涙ある者
忘するるな鷺の棲みにし奉天も國に殉せし大丈夫が屍に代し
のなるる屍に切り代えしものなるる」

薩摩琵琶歌終

明治四十二年二月十六日印刷
明治四十二年二月二十日發行

XXXXXXXXXXXX
定銀五十錢
XXXXXXXXXXXX

編輯者 那須祐直 東京芝區明舟町十八番地

發行者 内藤加我 全 京橋區銀座二丁目九番地

印刷者 田附平次郎 全 淺草區左衛門町一番地

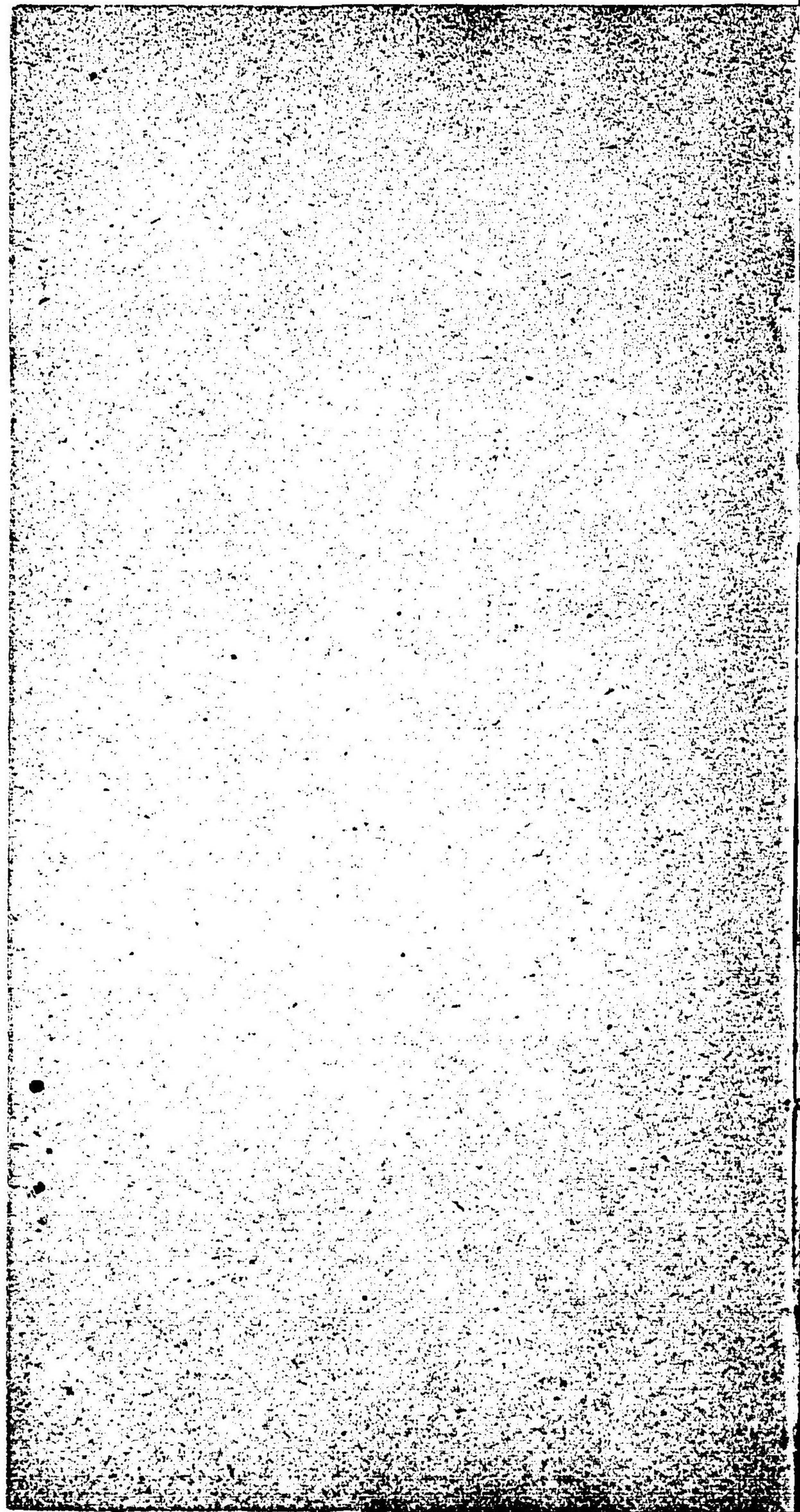


發行所

京橋區銀座
二丁目九番地

金櫻堂 内藤加我

電話新橋 一七二二番
振替口座 一三九九番



THE UNIVERSITY OF CHICAGO
PRESS

CHICAGO, ILLINOIS

1954

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS
54 EAST LAKE STREET
CHICAGO, ILLINOIS 60607

UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS
54 EAST LAKE STREET
CHICAGO, ILLINOIS 60607

259
139

1948-1949